

やんごとなき人にはかにいたづきに罹れりけりたやすからぬさまなりければ今このくすし一人に任せむもいかがりかれもくすしの道には世のつねならねばこれと心を合せて薬調ぜよといへばはじめのくすしかうべふりてさらばその世のつねならぬものに任せ給へかかるとみのいたづきを療治せむに人を語らひてはいか出で來べきといひければげにもとて初めに任せてければそのいたづきもすみやかに怠りぬ

まる〔こそ〕〔横さす〕〔よろづにかよはす〕

一六 とみのいたづき

やんごとなき人にはかにいたづきに罹れりけりたやすからぬさまなりければ今このくすし一人に任せむもいかなりかれもくすしの道には世のつねならねばこれと心を合せて薬調ぜよといへばはじめのくすしかうべふりてさらばその世のつねならぬものに任せ給へかかるとみのいたづきを療治せむに人を語らひてはいか出で來べきといひければげにもとて初めに任せてければそのいたづきもすみやかに怠りぬ

〔いたづき〕〔世のつねなりず〕〔とみ〕〔語らふ〕〔いかで出て來べき〕〔怠る〕

一七 家國のすがた

家國の姿はわかわかとあらまほしもし年老いたる姿になりもて行かば物事沈みはてて人に見知られじと物の色目も花やかならざれと思ふまでになり行くぞかしその心よりして人に秀でむの心もとよりなければ物の堪能上手もたえはてぬるものとなむ

家國の姿はわかわかとあらまほしもし年老いたる姿になりもて行かば物事沈みはてて人に見知られじと物の色目も花やかならざれと思ふまでになり行くぞかしその心よりして人に秀でむの心もとよりなければ物の堪能上手もたえはてぬるものとなむ

〔あらまほし〕〔なりもてゆく〕〔色目〕〔堪能〕

一八 膽をねること

膽をねるといふは如何にして得てむとたづねしに天命を知るにありこの知るはまことに知るをいふなりただこがねなどの慾は去りやすし好名の慾ぞいとかなしき古にも君父の命にそむきて身を潔くし朝廷の事をそしりて直をうるこれをしのぶならば何かしのび得ざらむとまで古より言ひしをやただその天命をまことに知りて疑ふことなればつゆも心の煩なくちりばかりもけがれなし獨寢ふす

「膽をねるといふは如何にして得てむ」とたづねしに「天命を知るにあり。この知るはまことに知るをいふなり。ただこがねなどの慾は去りやすし。好名の慾ぞいとかなしき。古にも、『君父の命にそむきて身を潔くし、朝廷の事をそしりて直をうる。これをしのぶならば、何かしのび得ざらむ』とまで、古より言ひしをや。ただその天命をまことに知りて疑ふことなれば、つゆも心の煩なく、ちりばかりもけがれなし。獨寢ふす」

まに愧ぢずとかいふかの浩浩たる氣
ともいふらむ

すまに愧ぢず。とかいふかの浩浩たる氣ともいふらむ。
〔天命〕〔好名の惡〕〔直をうる〕〔獨處ふすまに愧ぢず〕〔浩浩たる氣〕

一九 人は悪しき心あるものかな

わが悪しきをば桀紂を引きてなだめ
人の善きをば堯舜を引きてなだめ
むかれはかかる悪しき事なしぬといへば
へばげにさあらむといふこのものか
く善きことし侍りぬといへばいか
あらむいぶかしといふげにも人は悪
しき心あるものかなといへば善き名
得まほしと思ふがゆゑに人の悪しき
にてわが心をなだめ人の善きをば嫉
むより出でくるなりといひき

「わが悪しきをば、桀、紂を引きてなだめ、人の善きをば、堯、舜を引きいでてとがむ。かれはかかる悪しき事なしぬ。といへば、げにさあらむ。」といふ。このものかく善きことし侍りぬ。といへば、いかがあらむ、いぶかし。といふ。げにも人は悪しき心あるものかな。といへば、善き名得まほしと思ふがゆゑに、人の悪しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり。といひき。

〔桀紂を引きてなだむ〕〔げにさあらむ〕〔いかがあらむ〕〔いぶかし〕

二〇 花を見すててかへる

四方をふとうち見れば筑波嶺のあた
りいとほそくひらめきたる雲こそあ
りけれこの雲よ世にいふはやてなど
いふものなりけりあまりに朝よりめ
づらしく晴れたる日なればとてかね
てみのもかさもはなたで居しがはや
櫓おしたて漕ぎかへるをいかにこの
花を見すててかへるはかりがねにつ
らさやならへる櫓の音ばかりまなべ
よかしなどくちぐちにわらふを耳に
も入れて漕ぎさりぬ

四方をふとうち見れば、筑波嶺のあたりいとほそくひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふはやてなどいふものなりけり。あまりに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねてみのもかさもはなたで居しが、はや櫓おしたて漕ぎかへるを、いかにこの花を見すててかへるは、かりがねにつらさやならへる。櫓の音ばかりまなべよかし。など、くちぐちにわらふを耳にも入れて、漕ぎさりぬ。

〔ひらめく〕〔はやて〕〔かりがねに云々〕〔櫓の音ばかり云々〕

松屋文集鈔

一 鶴

鶴は空高く飛ぶも翅こそさだかに見えわかね静かなるさ
えわかね静かなるさまいとしるしま
して閒近くおりのたるはたとへばよ
き人の冠うへのきぬきて立ちたまへ
るに似ていといやんごとなげに見
ゆかし羽衣の雪はづかしく顔のかぎ
り紅きを千年經にけるなりといふは
仙人の數へ知りていひそめける事な
らむとぞ

鶴は、空高く飛ぶも、翅こそさだかに見えわかね、静かなるさ
まいとしるしまして、閒近くおりのたるは、たとへば、よき人
の冠うへのきぬきて立ちたまへるに似て、いといやんごと
となげに見ゆかし、羽衣の雪はづかしく、顔のかぎり紅きを、
千年經にけるなりといふは、仙人の數へ知りて、いひそめけ
る事ならむとぞ。

「さだかに」「しるし」「うへのきぬ」「雪はづかし」「顔のかぎ
り」

二 しくものぞなき

しくものぞなきと昔のなにがしがい

「しくものぞなき」と昔のなにがしがいたくめでしも、此のこ

たくめでしも此のころの月ならむと
そぞろに心うかれて暮るるよりはし
近くゐてながめつつ待つに霞ふかく
たちおほひていとど暗ういぶせきに
山ぎはのやうやうあかくなるは出づ
るなりけり霞もすこし晴れて照りも
せずくもりもはてぬながめはさやか
なる秋よりもまさりて心しれらむ人
に見せばやとこの月ばかりにもい
まほしうなむ

ろの月ならむと、そぞろに心うかれて、暮るるよりはし、近く
ゐて、ながめつつ待つに、霞ふかくたちおほひて、いとど暗う
いぶせきに、山ぎはのやうやうあかくなるは、出づるなりけ
り、霞もすこし晴れて、照りもせずくもりもはてぬながめは、
さやかなる秋よりもまさりて、心しれらむ人に見せばやと、
この月ばかりにもいまほしうなむ。

「しくものぞなき」「いぶせきに」「心しれらむ人」

三 夏はよる

夏はよる月の頃はさらなりと清少納
言のいひけることぞかし暮れはてて
夕やみの程はしばし物むつかしげな
れどそれも遣水のほとりに篝火たか
せなどすればをかしきほどなるひか
りに木の葉の色の青やかにきらきら
と見えたるいとすずしげなり月出で
ては又更にいはいはむ方なし端居してな
がむるに秋よりもまさりてあかずこ

「夏はよる、月の頃はさらなり」と、清少納言のいひけることぞ
かし、暮れはてて夕やみの程はしばし物むつかしげなれど、
それも遣水のほとりに篝火たかせなどすれば、をかしきほ
どなるひかりに、木の葉の色の青やかにきらきらと見え
るとすずしげなり、月出でては又更にいはいはむ方なし、端居
してながむるに、秋よりもまさりてあかずこそあれ。

そあれ

よろづの調度など目なれぬさまにやうかへて作りたるは今めかしきにしはしは目とまれどよく見ればそばつきざればみて心劣りし昔やうにてうるはしきはうははきえて見ゆれどやうやうに見まさりするものなりかしそれより人のちから入れつくれし所のすくなくおのづからなるは猶まさりけり

〔さらなり〕〔物むつかしげ〕

四 よろづの調度

よろづの調度など目なれぬさまにやうかへて作りたるは今めかしきにしはしは目とまれどよく見ればそばつきざればみて心劣りし昔やうにてうるはしきはうははきえて見ゆれどやうやうに見まさりするものなりかしそれより人のちから入れつくれる所のすくなく、おのづからなるは猶まさりけり。

〔調度〕〔やうかへて〕〔今めかしきに〕〔そばつき〕〔ざればむ〕

〔きえて見ゆ〕〔人のちから入れつくる〕

五 學ばでやはあるべき

いにしへと今とはこととなることも多かれどもものしほのほどほどに大きになればおもひ

いにしへと今とは、こととなることも多かれども、ものしれば智といふものの、ほどほどに大きになれば、おもひはか

かはりせまらずして古かかりつれば今はかうかうしてこそとなみなならぬをかしかうがへも出で來ぬべくよき人になるわざにしあれば上なくたふときものになむかくめでたきものなるを鳥獸はすぐれたるもえせずわくらはに人と生れて學ばでやはあるべき

りせまらずして、古かかりつれば、今はかうかうしてこそとなみなならぬをかしかうがへも出で來ぬべく、よき人になるわざにしあれば、上なくたふときものになむ、かくめでたきものなるを、鳥獸はすぐれたるもえせず、わくらはに、人と生れて學ばでやはあるべき。(松の落葉)

〔こととなること〕〔ほどほどに〕〔おもひはかり〕〔せまらずして〕〔かうがへ〕〔わくらはに〕

樞園文集鈔

一 花ざかりは更なり(一)

花ざかりは更なりさらでも柳など青
やかにうち煙りうらうらと照りたる
日は蕨土筆などいかならむと野山の
さまのみゆかしく思ひやられて庵の
中には籠り居がたきを人さへゆくり
なく訪ひ来つつ近きわたりまでいざ
いざなどそそのかすめり雨の降る日
はさること思ひ絶えて人はたおと
づれねば文机にのみよりゐたるなか
なかにをかしうなむ

花ざかりは更なりさらでも柳など青やかにうち煙りうらうらと照りたる日は蕨土筆などいかならむと野山のさまのみゆかしく思ひやられて庵の中には籠り居がたきを人さへゆくりなく訪ひ来つつ近きわたりまでいざいざなどそそのかすめり雨の降る日はさること思ひ絶えて人はたおとづれねば文机にのみよりゐたるなかなかにをかしうなむ。

〔さらでも〕〔うち煙る〕〔うらうらと〕〔ゆかし〕〔ゆくりなく〕
〔そそのかすめり〕〔さること思ひ絶えて〕〔はた〕

二 春雨の音(二)

萱ふける軒は雨の音しづかにて池水
のあやこまやかなるにいと深う霞め
る梢より翅しをれたる鳥どものそこ
はかとなく飛びわたるなどいといた
うをかし暮れぬればましていとしめ
やかにて見る書さへ今ひときは心し
みぬ風少し吹出でて燈臺の火の瞬き
たるに何とも知らぬ花の香のほのか
にうち薫りたるなどもをかし

萱ふける軒は雨の音しづかにて池水のあやこまやかなるにいと深う霞める梢より翅しをれたる鳥どものそこはかとなく飛びわたるなどいといたうをかし暮れぬればましていとしめやかにて見る書さへ今ひときは心しみぬ風少し吹出でて燈臺の火の瞬きたるに何とも知らぬ花の香のほのかにうち薫りたるなどもをかし。

〔池水のあや〕〔翅しをれたる鳥〕〔そこはかとなく〕〔しめやか〕
〔燈臺の火の瞬きたるに〕

三 つばくらめ

いとうららかなる日思ふどちうちつ
れゆく大路につばくらめのこなたか
なたに飛びかひてふと袖の下すぎた
る手にもとらへつべくていとをかし
雨のなごりのなほかわかぬ方など
おひりてひぢをふくみつつわらはべ
の走りくるに驚きたちて遠く翔りゆ

いとうららかなる日思ふどちうちつれゆく大路につばくらめのこなたかなたに飛びかひてふと袖の下すぎたる手にもとらへつべくていとをかし雨のなごりのなほかわかぬ方などおひりてひぢをふくみつつわらはべの走りくるに驚きたちて遠く翔りゆくもをかし。梁に集くひて、い

くもをかし乗に集くひていつの程にかあまたの雛おほしたるが飛びくる親をまちて口のかぎり開きつつ鳴きさわぎたるさまはいみじうこそあはれなれ

遠山寺の入相の鐘ねぐらに歸る夕鳥もいつしか聲しづまりてむかへる文巻もやうやう見えなくなりゆくに心ゆくわたりはいとくちをしきものから暫しうちおきて端の方にいづれば暮れのこる梢どものほのかなる山のはにはつかにあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ青鷺とかやいふ鳥のあやしき聲になきゆくが何となくものさびしげなるを來むといひつる友はた暮れすぐしてやとおもふも心もとなきにともし火挑げたるこそまづうれしけれ

の程にかあまたの雛おほしたるが飛びくる親をまちて口のかぎり開きつつ鳴きさわぎたるさまはいみじうこそあはれなれ。

〔思ふどち〕〔ひぢきふくむ〕〔集くふ〕〔雛おほしたつ〕

四 遠山寺の入相の鐘

遠山寺の入相の鐘ねぐらに歸る夕鳥もいつしか聲しづまりてむかへる文巻もやうやう見えなくなりゆくに心ゆくわたりはいとくちをしきものから暫しうちおきて端の方にいづれば暮れのこる梢どものほのかなる山のはにはつかにあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ青鷺とかやいふ鳥のあやしき聲になきゆくが何となくものさびしげなるを來むといひつる友はた暮れすぐしてやとおもふも心もとなきにともし火挑げたるこそまづうれしけれ。

〔入相の鐘〕〔ねぐら〕〔文巻〕〔心ゆくわたり〕〔はつかに〕〔あや

をさまれる世はうまやぢの行きかひもにぎははしく人宿す家はたたちつづきて草ひき結ぶ思ひもなきものからさすがにうちとけてしもねられぬは旅路のならひなるべし

暮れゆく野末にいと木暗う見えたる一むらは神の御社にやと思ふに木の間にほのめく火の光注連繩引きはへたる瑞籬のさまなどたどしきものからいとかうがうしく見えわたるに畔の細道たどり行きて鳥居のもとに至れば奥の方より年老いたる翁の腰屈まりたるが燈籠提げて出で來たるは御前の事どもものせしなるべし

しき聲〕〔心もとなし〕

五 旅路のならひ

をさまれる世はうまやぢの行きかひもにぎははしく人宿す家はたたちつづきて草ひき結ぶ思ひもなきものからさすがにうちとけてしもねられぬは旅路のならひなるべし。

〔うまやぢ〕〔行きかひ〕〔草ひき結ぶ思ひ〕〔さすがに〕

六 神の御社

暮れゆく野末にいと木暗う見えたる一むらは神の御社にやと思ふに木の間にほのめく火の光注連繩引きはへたる瑞籬のさまなどたどしきものからいとかうがうしく見えわたるに畔の細道たどり行きて鳥居のもとに至れば奥の方より年老いたる翁の腰屈まりたるが燈籠提げて出で來たるは御前の事どもものせしなるべし。

岩もる水のほのかなるを竹の樋もてすのこのもとにまかせやりつつあやしき水槽にたたへたるが夜晝となく滴る音のいみじう心すみてうき世の塵も清うすすぎはてぬる心地すおきふし安き獨住には山の鳥どももいたうなれて朝夕にこの水のほとりにおり來つつ羽うちそそぎなどするもまたなき友と思ひむつばれてなむ

〔野末〕〔未睡う〕〔一むら〕〔ほのめく〕〔注連繩〕〔引きはぶ〕〔瑞籬〕〔たどたどし〕〔かうがうし〕〔見えわたる〕〔たどる〕〔御前の事ども〕

七 岩もる水

岩もる水のほのかなるを竹の樋もてすのこのもとにまかせやりつつあやしき水槽にたたへたるが夜晝となく滴る音のいみじう心すみてうき世の塵も清うすすぎはてぬる心地す。おきふし安き獨住には、山の鳥どももいたうなれて、朝夕にこの水のほとりにおり來つつ、羽うちそそぎなどするも、またなき友と思ひむつばれてなむ。

〔ほのかなる〕〔まかせやる〕〔あやしき水槽〕〔思ひむつばれてなむ〕

八 あまのすみか

あまのすみかばかりあはれなるものはなしいとたよりなまらぬ松かげなどにただかりそめに作りたる藁屋どものさま浪うちよせなばやがて流れも失せぬべういとかなげに見ゆるを繪にかきすさびたるなどはなかなかにをかしきものからさてすまひなばなにごちかかせましと思ひやるだに心ぼそし

あまのすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の風もたまたまらぬ松かげなどに、ただかりそめに作りたる藁屋どものさま、浪うちよせなば、やがて流れも失せぬべういとかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なかなかにをかしきものから、さてすまひなば、なにごちかかせましと思ひやるだに心ぼそし。

〔たよりなき海邊の風もたまたまらぬ松かげ〕〔繪にかきすさぶ〕

九 あまのさへづり

一夜やどりて見れば浪風のひびき枕をゆすりてつゆまどろまれず曉がたとなりの家家めさましてなりはひの事どもなるべしあやしう聞きしらぬことどもをおのがじし聲高にいひかはしたるげにあまのさへづりめづらしうもをかしうも

一夜やどりて見れば、浪風のひびき枕をゆすりて、つゆまどろまれず、曉がた、となりの家家めさまして、なりはひの事どもなるべし、あやしう聞きしらぬことどもを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げにあまのさへづり、めづらしうも、をかしうも。

〔つゆ〕〔まどろむ〕〔なりはひ〕〔あまのさへづり〕〔めづらしう〕

もきかしうも)

一〇 燈火かかけてふづくゑに向ふ

寺寺の初夜の鐘のひびきもをさまりて皆人もねたるにいとうれしう燈火あかくしなしてふづくゑにうち向ひたるいみじう心すみて晝見しあたりの何心なくて過ぎにしも思ひしられの深き心ばへあるくだりくだりもおのづからとき得らるかしかなかげつくしてもなほねぶたさも知らず油さしそへつつ見てもゆくに遠き世の人もたださし向ひ語らふ心ちす

寺寺の初夜の鐘のひびきもをさまりて、皆人もねたるに、いとうれしう、燈火あかくしなして、ふづくゑにうち向ひたる、いみじう心すみて、晝見しあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひしられて、深き心ばへあるくだりくだりも、おのづからとき得らるかし。かなかげつくしても、なほねぶたさも知らず、油さしそへつつ見ても、ゆくに、遠き世の人、たださし向ひ語らふ心ちす。

〔初夜の鐘〕〔何心なくて〕〔深き心ばへあるくだりくだり〕〔かなかげつくす〕

一一 書

遠き世の書を見るほどにわれもその

遠き世の書を見るほどに、われもその世にあるこちして、

世にあるこちしてやがてその人人を友となしてうち語らふこちさへせらるるをわれも筆とりてよしなしごとども書きつくるがたままもちりぼひ残りて後の世に傳らば今の昔を見るが如く後の人はたわれを友とせむには千とせの末にさへ知る人あるこちしていとをかしくなむおぼゆる

やがてその人人を友となして、うち語らふこちさへせらるるを、われも筆とりて、よしなしごとども書きつくるが、たままも、ちりぼひ残りて、後の世に傳らば、今の昔を見るが如く、後の人はたわれを友とせむには、千とせの末にさへ知る人あるこちして、いとをかしくなむおぼゆる。

〔見るほどに〕〔やがて〕〔よしなしごと〕〔たままも〕〔ちりぼひ残る〕〔今の昔を〕

一二 家のみやは

をのことあらむもの家ののみやはと心たけく思ひ立ちしも日かずふるままにいとこひしう今も立ちかへらまほしき心地するをしひてねんじてへめぐるにいつしか年月も重なりぬ

をのことあらむもの、家ののみやはと、心たけく思ひ立ちしも、日かずふるままに、いとこひしう、今も立ちかへらまほしき心地するをしひてねんじてへめぐるに、いつしか年月も重なりぬ。

〔家のみやは〕〔心たけく〕〔ねんず〕

下篇 現代文

雜 鈔

一 詩は別才なり

詩は別才なりといひ詩人は生る成るにあらざといふは東西一般の金言なり今山陽の一生を考ふるにその性格といひその言行といひその著作といひ一として詩ならざるなしその童歳に當り夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なりその父母を懐ふに厚くその王室を懐ふに厚くその忠臣義士を懐ふに厚く情の熱するところ常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なりその北馬南船行李卸さざるところなく春花秋月遊展遍からざるところなきは

「詩は別才なり」といひ、詩人は生る、成るにあらざ、といふは、東西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるなし。その童歳に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父母を懐ふに厚く、その王室を懐ふに厚く、その忠臣義士を懐ふに厚く、情の熱するところ、常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船行李卸さざるところなく、春花秋月遊展遍からざるところなきは詩なり。その吟域を

詩なりその吟域を撤して諸生を待ち禮貌を外にして王公に接するは詩なり山陽の性格言行誰かこれを詩にあらずといはむ

撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王公に接するは詩なり。山陽の性格、言行、誰かこれを詩にあらずといはむ。
(朝比奈和泉)

〔別才〕〔金言〕〔童歳〕〔夙成〕〔老博士〕〔北馬南船〕〔遊展〕〔吟域] を撤して諸生を待つ〕〔禮貌を外にして王公に接す〕

二 英雄を以て兒女の情なしとす

世或は月照の死に對して西郷を議する者ありといへども我を以て之を見るに唯その跼天踳地の志士を憐むの情に堪へず之を救ふの道なきがために自ら亦死を決して共に海に投じたるに過ぎず漫りに揣摩臆測を逞しうして種種の言議を挟むが如きは英雄を以て兒女の情なしとするの妄に坐す

世或は月照の死に對して、西郷を議する者ありといへども、我を以て之を見るに、唯、その跼天踳地の志士を憐むの情に堪へず、之を救ふの道なきがために、自ら亦死を決して共に海に投じたるに過ぎず。漫りに揣摩臆測を逞しうして種種の言議を挟むが如きは、英雄を以て兒女の情なしとするの妄に坐す。
(尾崎行雄)

〔跼天踳地〕〔揣摩臆測〕〔言議を挟む〕〔兒女の情〕〔妄に坐す〕

曩に君の故山に歸養せしより久しく其の警款に接することを得ざりしかど舊雨の感豈一日も有朋の懷に往來せざらむや圖らざりき一旦滄桑の變に遭ひてここに君と旗鼓の間に相見ゆるに至らむとは

三 舊雨の感

曩に君の故山に歸養せしより久しく其の警款に接することを得ざりしかど舊雨の感豈一日も有朋の懷に往來せざらむや圖らざりき一旦滄桑の變に遭ひてここに君と旗鼓の間に相見ゆるに至らむとは。(山縣有朋)

故山〔歸養す〕〔警款に接す〕〔舊雨の感〕〔圖らざりき〕〔一旦〕〔滄桑の變〕〔旗鼓の聞〕

四 明治の朝廷に人あり

故右府公は播紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど夙に大勢を達觀して王政に公武の別なきことを看破し中興の實を擧ぐるために神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へるはこれぞ明治の朝廷に人ありと申すべきこの一大義は百揆庶政の原動力となりて

故右府公は播紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど夙に大勢を達觀して王政に公武の別なきことを看破し中興の實を擧ぐるために神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へるはこれぞ明治の朝廷に人ありと申すべきこの一大義は百揆庶政の原動力となりて藤原氏以來千餘年間の盤根錯

藤原氏以來千餘年間の盤根錯節をば總て破竹の勢を以て破りたり

節をば總て破竹の勢を以て破りたり。(井上毅)

〔右府〕〔播紳〕〔有職〕〔達觀〕〔公武〕〔中興〕〔百揆〕〔盤根錯節〕〔破竹の勢〕

五 玉の御聲

明治時代の詔勅は森嚴雄大永く國史を照らして後世の國民に聖代を語り典範を示すものである併し詔勅にはそれぞれの形式があり聖意を承けて起草する人のあることも明白である御製は直ちに大御心の發したもので之を拜誦するものは即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである草莽の微臣まで日日玉の御聲を拜聽するの光榮を有するのは實に我が國民の特殊な幸福であるのである

明治時代の詔勅は森嚴雄大永く國史を照らして後世の國民に聖代を語り典範を示すものである併し詔勅にはそれぞれの形式があり聖意を承けて起草する人のあることも明白である御製は直ちに大御心の發したもので之を拜誦するものは即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである草莽の微臣まで日日玉の御聲を拜聽するの光榮を有するのは實に我が國民の特殊な幸福であるのである。(芳賀矢一)

〔森嚴雄大〕〔國史を照らす〕〔典範〕〔御製〕〔直接に〕〔玉の御聲〕〔拜誦す〕〔草莽の微臣〕

祖先崇拜の大義は血統團體を構成し維持する原因たると同時に血統團體の存續は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし深遠にする効果あり二者相待ちて消長し須臾も離るべからず而して我が固有の國民道德たる忠孝友和信愛の道は一に皆祖先崇拜の大義に淵源し血統團體を保持する軌轍たり我が堅固なる國家の體制は祖先教の上に立つ之を千古に継ぎ萬世に傳ふるは我が民族の特質にして我が國體の精華たる所なり

六 我が國體の精華

祖先崇拜の大義は血統團體を構成し維持する原因たると同時に血統團體の存續は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし深遠にする効果あり二者相待ちて消長し須臾も離るべからず而して我が固有の國民道德たる忠孝友和信愛の道は一に皆祖先崇拜の大義に淵源し血統團體を保持する軌轍たり我が堅固なる國家の體制は祖先教の上に立つ之を千古に継ぎ萬世に傳ふるは我が民族の特質にして我が國體の精華たる所なり。(穂積八束)

〔祖先崇拜〕〔大義〕〔血統團體〕〔鞏固にす〕〔消長す〕〔須臾〕〔淵源〕〔軌轍〕〔體制〕〔祖先教〕〔精華〕

七 玉芙蓉

傳へ言ふ孝靈帝の御宇東海の氣漸く清明に始めて不二の高嶺を中霽に見たりと斯の山古來秀でて靈あり頂は分れて八峯を成し其の雪を戴くが爲に宛も玉芙蓉の如し山容巍然仰げばいや高く望めばいや尊し歌仙も其の高き狀を歌ひ盡すこと能はず畫聖も其の尊き態を畫き盡すこと能はず岳神は容易に祕奥の符を示さずして唯人の獨詣して冥契を得るに任せ三千年にして一人之を歌ふものあり五

清明に始めて不二の高嶺を中霽に見たりと斯の山古來秀でて靈あり頂は分れて八峯を成し其の雪を戴くが爲に宛も玉芙蓉の如し山容巍然仰げばいや高く望めばいや尊し歌仙も其の高き狀を歌ひ盡すこと能はず畫聖も其の尊き態を畫き盡すこと能はず岳神は容易に祕奥の符を示さずして唯人の獨詣して冥契を得るに任せ三千年にして一人之を歌ふものあり五

高嶺を中霽に見たりと斯の山古來秀でて靈あり頂は分れて八峯を成し其の雪を戴くが爲に宛も玉芙蓉の如し山容巍然仰げばいや高く望めばいや尊し歌仙も其の高き狀を歌ひ盡すこと能はず畫聖も其の尊き態を畫き盡すこと能はず岳神は容易に祕奥の符を示さずして唯人の獨詣して冥契を得るに任せ三千年にして一人之を畫くものあるを俟つのみ。(遅塚金太郎)

〔中霽〕〔靈〕〔玉芙蓉〕〔巍然〕〔祕奥の符〕〔冥契〕

八 一雙の清眸萬有より閉ぢぬ

あはれ我が友あさましうも打衰へたるかな昨日までも光榮の華冕打翳して曙の歌勇ましかりし雄姿今何處にか認むべき昂かりし頭は倦れ麗しかりし冠は折れて燃えのぼる滿身の炎に土の如き黝色傷ましく嵐を嘲りし

あはれ我が友あさましうも打衰へたるかな昨日までも光榮の華冕打翳して曙の歌勇ましかりし雄姿今何處にか認むべき昂かりし頭は倦れ麗しかりし冠は折れて燃えのぼる滿身の炎に土の如き黝色傷ましく嵐を嘲りし兩翮は萎

兩翮は萎みて影の如く敵を挫きし爪
嘴は拳曲して力なし生氣光澤人に迫
るの力ありし渾身の羽毛は空しく枯
葉を束ね一雙の清眸は全く萬有より
閉ぢぬ昂然闊歩せし嚙昔の姿永へに
庭上に消えて唯見る衰殘の孤影蹒跚
たり踰踏たるを

(綱島榮一郎)

芭蕉は一俳人なりされど五十年の生
涯を自然の偶仰にさきけて或は奥羽
象潟の時雨に腸を絞り武は佐渡北海
の荒海に魂を削りて一樹の假の宿り
にもとくとくの雫結びもあへず旅魂
そぞろに枯野の風雲を追へりし彼が

芭蕉は一俳人なりされど五十年の生涯を自然の渴仰にさ
さげて或は奥羽象潟の時雨に腸を絞る或は佐渡北海の荒
海に魂を削りて一樹の假の宿りにもとくとくの雫結びも
あへず旅魂そぞろに枯野の風雲を追へりし彼が姿をしの

九 芭蕉は一俳人なり

〔あさましうも〕〔光榮の華冕〕〔曙の歌〕〔燃えのぼる渾身の
炎〕〔鷗色〕〔風を嘲りし兩翮〕〔影の如し〕〔拳曲〕〔生氣〕〔渾身〕
〔空しく枯葉を束ね〕〔一雙の清眸は全く萬有より閉ぢぬ〕〔昂
然闊歩す〕〔嚙昔の姿〕〔衰殘の孤影〕〔蹒跚〕〔踰踏〕

姿をしのぶもの誰かその魂に鑄られ
たる實の一字を否むべき彼は自ら謙
して花鳥に情を役して此の一筋にか
かるといへりしかも行行しはしば大
自然の幽玄の一路に分入りて覺えず
泪下りしその意識よあはれ彼は趣味
の門より入りて趣味の太原に道交し
ぬ

ぶもの、誰かその魂に鑄られたる實の一字を否むべき。彼は
自ら謙して、花鳥に情を役して此の一筋にかかるといへり。
しかも行行しはしば大自然の幽玄の一路に分入りて、覺え
ず泪下りしその意識よあはれ彼は趣味の門より入りて、趣
味の太原に道交しぬ。(綱島榮一郎)

〔自然の渴仰〕〔腸を絞る〕〔魂を削る〕〔一樹の假の宿り〕〔とく
とくの雫〕〔旅魂〕〔枯野の風雲を追ふ〕〔實の一字〕〔自ら謙す〕
〔花鳥に情を役す云々〕〔幽玄〕〔太原〕〔道交す〕

一〇 詩よりして神に之く

詩を讀みて當然起り來たる美意識以
外心はいつしか一步その奥を辿りて
覺えず實在と撞著して嗚呼神よと叫
ぶことあり神に一念の誠をささぐる
刹那心はいつしか歎美の態度にすべ
りてあはれあはれと風月の情そぞろ
なることあり詩よりして神に之き神

詩を讀みて當然起り來たる美意識以外、心はいつしか一步
その奥を辿りて、覺えず實在と撞著して、嗚呼神よと叫ぶこ
とあり。神に一念の誠をささぐる刹那、心はいつしか、歎美の
態度にすべりて、あはれあはれと風月の情そぞろなること
あり。詩よりして神に之き神よりして詩に之く。此の如きは

よりして詩に之く此の如きは辿りふかき人の経験する事實なり

辿りふかき人の経験する事實なり。(綱島榮一郎)
〔美意識〕〔實在〕〔撞著〕〔歎美の態度にすべる〕〔風月の情そぞろなることあり〕〔詩よりして神に之き云々〕〔経験する事實〕

一 成功の意義

假令活動向上が何等の較著なる効果を産せずとも假令落落たる雄心浩志を抱いて空しく蓬蒿の中に埋了するが如きことありとも誰か之を目して全く失敗せりとせむや之を失敗せりとするはこれ畢竟己が狭陋なる功利的打算的の眼を以てのみ成功の意義を解すればなり

假令活動向上が何等の較著なる効果を産せずとも假令落落たる雄心浩志を抱いて空しく蓬蒿の中に埋了するが如きことありとも誰か之を目して全く失敗せりとせむや之を失敗せりとするはこれ畢竟己が狭陋なる功利的打算的の眼を以てのみ成功の意義を解すればなり。(綱島榮一郎)
〔向上〕〔較著〕〔落落〕〔浩志〕〔蓬蒿〕〔功利的〕〔打算的〕

二 頼家公の墓

昨日は雨の日暮し無聊に困み夕景始めて傘撃して川向の小山なる頼家公の墓を拜し申し候時政爺の邪慳何ぞ

昨日は雨の日暮し無聊に困み夕景始めて傘撃して川向の小山なる頼家公の墓を拜し申し候時政爺の邪慳何ぞ今に

今に執著して假さざることかくの如きやと見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の残石を留めて慘禍を生前に極め恥辱を末代にさらされ候事御身一たびは征夷大將軍の顯榮にもものぼり給ひつる御運にして如何なる前世の御宿業にかおはしけむと低回去るに忍びかね候

執著して假さざることかくの如きやと見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の残石を留めて慘禍を生前に極め恥辱を末代にさらされ候事御身一たびは征夷大將軍の顯榮にもものぼり給ひつる御運にして如何なる前世の御宿業にかおはしけむと低回去るに忍びかね候。(尾崎徳太郎)

〔無聊〕〔邪慳〕〔執著す〕〔いたはし〕〔荒涼〕〔慘禍〕〔顯榮〕〔宿業〕
〔低回〕

一三 まことによくこそ我は來つれ

まことによくこそ我は來つれ何ぞ來る事の甚だ遅かりし山の麗しといふも壤の堆きもののみ川の暢けしといふも水の逝くに過ぎざるを牢として抜くべからざるわが半生の痼疾はいかで壤と水との醫すべきものならむと齒牙にもかけず悔りたりし己こそ

まことによくこそ我は來つれ何ぞ來る事の甚だ遅かりし山の麗しといふも壤の堆きもののみ川の暢けしといふも水の逝くに過ぎざるを牢として抜くべからざるわが半生の痼疾はいかで壤と水との醫すべきものならむと齒牙にもかけず悔りたりし己こそ先づ悔らるべき愚のものなれ

先づ侮らるべき愚のものなれや

風水相撃ちて波を爲す孤掌の鳴らし難きが如く感興は書齋の閑居に生ずるものにあらず我をして自ら進んで自然の中に住ましめよ自然も亦旋りて我が中に住むべきなり

や。(尾崎徳太郎)

〔徳の堆きもの〕〔響けし〕〔幸として〕〔痼疾〕〔齒牙にもかけず〕

一四 風水相撃ちて波を爲す

風水相撃ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものにあらず。我をして自ら進んで自然の中に住ましめよ。自然も亦旋りて我が中に住むべきなり。

(山路彌吉)

〔痼疾〕〔感興は書齋の閑居に生ずるものにあらず〕〔自然も亦旋りて我が中に住むべきなり〕

一五 忠孝兩全の歎

洵に忠孝兩全の歎ありて骨肉の私情さすがに絶ち易からず小云爲の先後必ずしも辨じ難からず何ぞ妄りに一身の安慰を冥冥の後にのみ求むべしとせむ

洵に忠孝兩全の歎ありて、骨肉の私情さすがに絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥冥の後にのみ求むべしとせむ。

のみ求むべしとせむ

(高山林次郎)

〔忠孝兩全の歎〕〔骨肉の私情〕〔事體の大小〕〔云爲の前後〕〔必ずしも辨じ難からず〕〔冥冥の後〕

一六 菅公の詩境

太宰府の配居は菅公に取りて絶好の詩境なり。外に名利の競争なく、内に危殆の憂悶なし。公や靜かに往時を懷慕し、現境を思料し、咏嘆に依りて其の哀情を遣るべかりしなり。天は公に授くるに詩人の天分を以てして、而して先づ公に與ふるに政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩悩内に公を苦しめ、讒奸外に公を陥れ、遂に公をして無告の流人たらしめたり。是の如くするにあらざれば、公は遂に詩人たる能はざりしなり。

太宰府の配居は、菅公に取りて絶好の詩境なり。外に名利の競争なく、内に危殆の憂悶なし。公や靜かに往時を懷慕し、現境を思料し、咏嘆に依りて其の哀情を遣るべかりしなり。天は公に授くるに、詩人の天分を以てして、而して先づ公に與ふるに、政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩悩内に公を苦しめ、讒奸外に公を陥れ、遂に公をして無告の流人たらしめたり。然れども、悲しいかな、是の如くするにあらざれば、公は遂に詩人たる能はざりしなり。

(高山林次郎)

〔絶好の詩境〕〔危殆の憂悶〕〔思料す〕〔咏嘆〕〔天分〕〔煩悩〕〔讒〕

好

一七 孔子既に志を魯に得ず

孔子既に志を魯に得ず乃ち慨然として故國を出で大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に回さむとすその志や高且大なりと謂ふべしかくの如くにして四方を漂浪すること十三年時非にして道容れられず世また耳を名教に傾くる者なしここに於て已むを得ず老脚蹉跎として再び魯に歸り歎じて曰く嗚呼吾が道遂に窮す世遂にわれを知るものなきかと

孔子既に志を魯に得ず乃ち慨然として故國を出で大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に回さむとすその志や高且大なりと謂ふべしかくの如くにして四方を漂浪すること十三年時非にして道容れられず世また耳を名教に傾くる者なしここに於て已むを得ず老脚蹉跎として再び魯に歸り歎じて曰く嗚呼吾が道遂に窮す世遂にわれを知るものなきかと。(高山林次郎)

〔大義名分〕〔狂瀾を既倒に回す〕〔漂浪す〕〔名教〕〔老脚蹉跎〕

一八 天上の明月

國破れて山河ありといふとも而も天上の明月の長へに渝らざるに較べなば山河もなほ桑滄の變あるを免れじ

國破れて山河ありといふとも而も天上の明月の長へに渝らざるに較べなば山河もなほ桑滄の變あるを免れじ。され

されば人生古今の盛衰を瞰下して而も自らは一分の隆替をも感ぜざる月が過去世の追憶に際して最も有力なる媒介者たるは極めて自然のことなるべく月によつて遠人を懷慕する情も同一の起源を有すべし

ば、人生古今の盛衰を瞰下して、而も自らは一分の隆替をも感ぜざる月が、過去世の追憶に際して、最も有力なる媒介者たるは、極めて自然のことなるべく、月によつて遠人を懷慕する情も、同一の起源を有すべし。(高山林次郎)

〔國破れて山河あり〕〔桑滄の變〕〔隆替〕〔媒介者〕〔遠人〕

一九 其の人によりて其の文を品す

蓋し文を論ずるにひたすら文による必ずしも當れりとせず其の人によりて其の文を品するに及びて情偽是非更に一段の分明を加ふるものなりこれ節行の亦文士に重んずべき所以なるか

蓋し文を論ずるに、ひたすら文による、必ずしも當れりとせず、其の人によりて其の文を品するに及びて、情偽是非更に一段の分明を加ふるものなり。これ節行の、亦文士に重んずべき所以なるか。(高山林次郎)

〔品す〕〔情偽〕〔是非〕〔一段の分明〕〔節行〕

二〇 進歩の標準

書は能く人を教へ自然は能く人を造

書は能く人を教へ、自然は能く人を造る。社會は能く人を制

る社會は能く人を制し自然は能く人を解放す人をして能く其の本に歸らしむるものは自然なり社會も亦時に自然に歸するを要する時あり自然は何れの時代に於ても進歩の標準なればなり

人は如何にせば死して生くるを得むか世に神に禱りて永生を求むるものあり佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂寞を求むされど形體を離れて魂魄なきを如何にすべきその墳墓を壯大にし金を鏤め石に刻して名の後世に傳らむことを求むるものありされど時はすべての物の破壊者なり風雨幾歳時移り人渝り桑滄幾度か變轉して墓標獨り全きを得べけむやかくの如きは永生の道にあらざるなりまことの永生は名によりて生く

し、自然は能く人を解放す。人をして能く其の本に歸らしむるものは自然なり。社會も亦時に自然に歸するを要する時あり。自然は何れの時代に於ても進歩の標準なればなり。

(高山林次郎)

〔自然〕〔社會〕〔制す〕〔解放す〕〔其の本〕〔進歩の標準〕

二一 永生の道

人は如何にせば死して生くるを得むか。世に神に禱りて、永生を求むるものあり。佛に願ふものは、人生の倏忽を歎きて、涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて、魂魄なきを如何にすべき。その墳墓を壯大にし、金を鏤め石に刻して、名の後世に傳らむことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して、墓標獨り全きを得べけむ。やかくの如きは永生の道にあらざるなり。まことの永生は、名によりて生くるにあらざるして、事

るにあらざるして事によりて生くるなり。儒教の存する所、今なほ孔子あらざるは、佛寺の建てる所、到る處に釋迦あり。耶蘇は十字架に懸りきといへども、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激するもの、胸には楠公其の人の生命あり。蒸氣機關の動く所にはワットの血液あり。電氣の線の懸る所は、即ちフランクリンが永生の地にあらざるや。

人に百歳の齡なく、世に別離の愁を知らざる人は、あらし、別離は却て懷慕のたのしみを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。

によりて生くるなり。儒教の存する所、今なほ孔子あらざるは、佛寺の建てる所、到る處に釋迦あり。耶蘇は十字架に懸りきといへども、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激するもの、胸には楠公其の人の生命あり。蒸氣機關の動く所には、ワットの血液あり。電氣の線の懸る所は、即ちフランクリンが永生の地にあらざるや。(高山林次郎)

〔死して生く〕〔永生〕〔倏忽〕〔涅槃の寂寞〕〔事によりて生く〕

二三 神相接せしむ

人に百歳の齡なく、世に別離の愁を知らざる人は、あらし、生、死は世の常なり。別離は却て懷慕のたのしみを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。(姉崎正治)

〔世の常〕〔懷慕のたのしむ〕〔時と處との隔を越えて神相接せしむ〕

平家の一門廟堂に列し六波羅の榮華四時を春にせる時東國草萊の間に潜める源氏の一族忽ち崛起して之を追ひ落し鎌倉の覇府新に政治の中心となれり其の變轉の激甚なる其の曲折の多様なる我が國史の繪卷中色彩際立ちて絢爛たるを見る

二三 鎌倉の覇府

平家の一門廟堂に列し六波羅の榮華四時を春にせる時東國草萊の間に潜める源氏の一族忽ち崛起して之を追ひ落し鎌倉の覇府新に政治の中心となれり其の變轉の激甚なる其の曲折の多様なる我が國史の繪卷中色彩際立ちて絢爛たるを見る。(大町芳衛)

〔廟堂〕〔六波羅〕〔草萊の間に〕〔崛起〕〔覇府〕〔曲折〕〔繪卷〕〔絢爛〕

二四 太平愈續きて文化愈進む

干戈天下に旁午して兵馬倥傯肝腦長へに地に塗れ腥風到る處に吹きすさぶ間は文化の芽の萌さむよしもなければ一たび馬は華山の陽に歸り牛は桃林の野に放たれ堯雨舜風太平の氣象融融として起るに及びて文化の芽茲に始めて萌す太平愈續きて文化愈進む

干戈天下に旁午して兵馬倥傯肝腦長へに地に塗れ腥風到る處に吹きすさぶ間は文化の芽の萌さむよしもなければ一たび馬は華山の陽に歸り牛は桃林の野に放たれ堯雨舜風太平の氣象融融として起るに及びて文化の芽茲に始めて萌す太平愈續きて文化愈進む文化愈進むて生活の程度

進む文化愈進みて生活の程度愈高し所謂治に在りて亂を忘るるの危機實にこの際に胚胎す

愈高し所謂治に在りて亂を忘るるの危機實にこの際に胚胎す。(大町芳衛)

〔干戈天下に旁午す〕〔兵馬倥傯〕〔肝腦地に塗る〕〔腥風〕〔文化の芽の萌さむよしもなし〕〔馬は華山の陽に歸り云々〕〔堯雨舜風〕〔太平の氣象〕〔融融〕〔危機〕〔胚胎〕

二五 深山の奥の一本の櫻

櫻は多きをよしとすされど人跡絶えたる山奥清水ちよるちよる流るるあたりよしや事を解せざる詩人は紅葉と共に夜の錦にならずふともその梢とも見えざりし一本の櫻の花にあらはるるも亦興あらずや

櫻は多きをよしとすされど人跡絶えたる山奥清水ちよるちよる流るるあたりよしや事を解せざる詩人は紅葉と共に夜の錦にならずふともその梢とも見えざりし一本の櫻の花にあらはるるも亦興あらずや。(大町芳衛)

〔よしや〕〔事を解せざる詩人〕〔紅葉と共に夜の錦にならずふとも〕〔その梢とも見えざりし一本の櫻〕〔花にあらはる〕

二六 平家物語はさながらの戯曲

祇園精舎の鐘の聲沙羅雙樹の花の色
卷を開いてまづ響く琅琅の調は流麗
にしてまた凄慘なり二十年の榮華の
夢昨日は樓臺の花の宴に盃を廻らし
今日は海上に楫を枕に月に泣く有爲
轉變の世の習とはいひながら榮枯盛
衰掌を覆すこと平家の一門の如きは
古今東西に例少くありの儘の事實は
詩人の空想を待たずしてさながらの
戯曲なりその局面の波瀾に富めるは
即ち平家物語の七百年後の今日もな
ほ世人に愛讀せらるる所以にして一
篇の樞軸たる大人物はいふまでもな
く太政入道淨海なり

余輩が歴史上の事實を一の戯曲とし
て最も興味を感ずるは壯大なる偉人
と時代の思潮と交渉する際に衝突を

祇園精舎の鐘の聲沙羅雙樹の花の色、卷を開いてまづ響く
琅琅の調は、流麗にしてまた凄慘なり。二十年の榮華の夢、昨
日は樓臺の花の宴に盃を廻らし、今日は海上に楫を枕に月
に泣く。有爲轉變の世の習とはいひながら、榮枯盛衰掌を覆
すこと、平家の一門の如きは、古今東西に例少く、ありの儘の
事實は、詩人の空想を待たずして、さながらの戯曲なり。その
局面の波瀾に富めるは、即ち平家物語の七百年後の今日も、
なほ世人に愛讀せらるる所以にして、一篇の樞軸たる大人
物は、いふまでもなく太政入道淨海なり。(藤岡作太郎)

〔祇園精舎の鐘の聲〕〔沙羅雙樹の花の色〕〔琅琅の響〕〔流麗〕
〔凄慘〕〔有爲轉變〕〔戯曲〕〔樞軸〕〔入道〕

二七 悲劇的人物

余輩が歴史上の事實を一の戯曲として最も興味を感ずる
は、壯大なる偉人と時代の思潮と交渉する際に、衝突を生じ、

生じ破綻を起すところにあり、社會よ
り離れて孤立せる人は敢て與らず、紛
紛擾擾たる群衆の蛙鳴蟬噪も敢て與
らず、この點より見て悲劇的運命を具
有したる歴史的人物は、清盛を措いて
他に誰かある

破綻を起すところにあり、社會より離れて孤立せる人は敢
て與らず、紛紛擾擾たる群衆の蛙鳴蟬噪も敢て與らず、この
點より見て悲劇的運命を具有したる歴史的人物は、清盛を
措いて他に誰かある。(藤岡作太郎)

〔時代の思潮〕〔交渉〕〔破綻〕〔與らず〕〔紛紛擾擾〕〔蛙鳴蟬噪〕

二八 業平の歌

業平の歌は眞率にして虚飾なく、直下
に人情を傾倒して餘蘊なし、かくして
彼は平安朝最初の第一の歌人にして、また
またこの朝を盡しての第一等の歌人
なり、唯この朝の末にありてよくその
壘を摩し、時に一頭地を抜きさへもせし
もの西行法師あり、西行は自然の懷
に隠れ、業平は人生の波に漂ふ、西行は
出でて天地の間に放浪せしに、業平は
人生を内觀して性情の波瀾を詩化せ
り

業平の歌は、眞率にして虚飾なく、直下に人情を傾倒して餘
蘊なし、かくして彼は平安朝最初の第一の歌人にして、また
この朝を盡しての第一等の歌人なり。唯、この朝の末にあり
て、よくその壘を摩し、時に一頭地を抜きさへもせしもの西
行法師あり、西行は自然の懷に隠れ、業平は人生の波に漂ふ。
西行は出でて天地の間に放浪せしに、業平は人生を内觀し
て、性情の波瀾を詩化せり。(藤岡作太郎)

〔眞率〕〔虚飾〕〔直下に〕〔人情を傾倒す〕〔餘蘊〕〔壘を摩す〕〔一

頭地を抜きさへもせしもの」〔自然の懐に睡る〕〔人生の波に漂ふ〕〔放浪す〕〔内觀す〕〔性情の波瀾〕〔詩化す〕

二九 西行は生れながらの歌よみ

西行は生れながらの歌よみにして歌を作るものにあらず天籟吹來つて松濤即ち鳴るその聲必ず自然を離れず平易率直を旨とすれども風凄じければ鳴ることも亦強し時に婉曲の響あれども故らに人爲の巧を加へねば天成の詩美は千歳の下愈光を増して後人をして渴仰止まざらしむるなり

西行は生れながらの歌よみにして歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ、鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は、千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。〔藤岡作太郎〕

〔天籟〕〔松濤〕〔自然を離れず〕〔率直〕〔風凄じければ云々〕〔婉曲〕〔天成の詩美〕〔千歳の下〕〔渴仰〕

三〇 俊成の詠ずるところ

藤原俊成の詠ずるところ艶麗にして

藤原俊成の詠ずるところ、艶麗にして、幽婉、しかも力めて高

幽婉しかも力めて高雅の趣を脱せざらむことを期す渾然たる美玉毫も斧鑿の痕なきが如しといへどもこれなほ琢磨の果なり天受の才は才なりといへども放縱の才にあらずして折衷の才なり學を積み想を練り苦心慘愴として遂に一家を成すかれの歌は村舎の白梅東風に野香を恣にするものにあらずして瓶裏の紅梅枝を矯めて形を正せるものなり

雅の趣を脱せざらむことを期す。渾然たる美玉、毫も斧鑿の痕なきが如しといへども、これなほ琢磨の果なり。天受の才は才なりといへども、放縱の才にあらずして、折衷の才なり。學を積み、想を練り、苦心慘愴として、遂に一家を成す。かれの歌は、村舎の白梅、東風に野香を恣にするものにあらずして、瓶裏の紅梅、枝を矯めて形を正せるものなり。〔藤岡作太郎〕

〔幽婉〕〔渾然〕〔斧鑿の痕〕〔琢磨〕〔放縱の才〕〔折衷の才〕〔苦心慘愴〕〔野香〕

三一 權貴の家に生れたるもの

權貴の家に生れたるものは深宮の中婦人の手に育ちて絶えて人生行路の險を知らず腫を動かせば膏梁前に湧くまた世に一碗の食に飢うるものあるを知らむや而も一旦運命の變に遇へば穢なき小舟のいかで暴風怒濤に堪ふべき忽ち困憊して一點の泡沫消

權貴の家に生れたるものは、深宮の中婦人の手に育ちて、絶えて人生行路の險を知らず、腫を動かせば膏梁前に湧く、また世に一碗の食に飢うるものあるを知らむや、而も一旦運命の變に遇へば、穢なき小舟のいかで暴風怒濤に堪ふべき、忽ち困憊して、一點の泡沫消えて行くところを知らず、夢よ

えて行くところを知らず夢よりもは
かなくして再び得難き此の生を終ふ
ることその例多し

りもはかなくして再び得難き此の生を終ふることその例
多し。(藤岡作太郎)

〔権貴の家〕〔深宮の中〕〔人生行路の險〕〔齊梁前に濁く〕〔困憊〕
〔一點の泡沫消えて行くところを知らず〕

三二 内部に待つもの

内部に待つものなければ外力の来る
に應ぜず東風春雨は草木發生の因と
なれども種子下に含むなくんば如何
疾疫の氣勢を逞しくするも健全にし
て内に憫む所なき身體をおかすこと
能はず禪教などの影響によりて美感
の變遷を來せりといふと雖もこれに
先ちて邦人の心にその素なくんばあ
らず

内部に待つものなければ外力の来るに應ぜず東風春雨は
草木發生の因となれども種子下に含むなくんば如何疾疫
の氣勢を逞しくするも健全にして内に憫む所なき身體を
おかすこと能はず禪教などの影響によりて美感の變遷を
來せりといふと雖もこれに先ちて邦人の心にその素なく
んばあらず。(藤岡作太郎)

〔外力〕〔疾疫〕〔氣勢を逞しくす〕〔内に憫む所〕〔美感〕〔素〕

三三 成敗と是非

成敗と是非とは判然別事に屬す成敗
は當時の形勢によりて別れ是非は後
人の公説によりて定まる若し成者皆
是にして敗者必ず非ならば君子不遇
の歎あらずして正人雪冤を後代に望
む慨なかるべし

成敗と是非とは判然別事に屬す成敗は當時の形勢により
て別れ是非は後人の公説によりて定まる若し成者皆是に
して敗者必ず非ならば君子不遇の歎あらずして正人雪冤
を後代に望む慨なかるべし。(島田三郎)

〔成敗〕〔判然〕〔形勢〕〔公説〕〔不遇の歎〕〔雪冤〕

三四 言論の自由社會に存せず

言論の自由社會に存せず編史の業政
務の一部たりし世に在りては史氏興
朝の爲に同護の筆を執るが故に記事
に曲筆多く批評に公正を得難かりし
なりその積習の風を成すや何等の拘
束なき人がこの時期既に去りたる世
にありて筆を執りても亦成敗と是非
とを混入してみづから曉らず陋とい
ふべし

言論の自由社會に存せず編史の業政務の一部たりし世に
在りては史氏興朝の爲に同護の筆を執るが故に記事に曲
筆多く批評に公正を得難かりしなりその積習の風を成す
や何等の拘束なき人がこの時期既に去りたる世にありて
筆を執りても亦成敗と是非とを混入してみづから曉らず
陋といふべし。(島田三郎)

〔史氏〕〔興朝〕〔同護の筆〕〔曲筆〕〔その積習の風を成すや〕〔何
等の拘束なき人〕〔陋〕

菽の初菘の初かはゆき甲拆の姿のしをらしや地歴すれば芽ざさむとして芽ざし難きまま伸びむとして屯り身を屈めて一力入れ根入漸く足りて辛うじて世に出でたる嫩青微緑柔かにして夢を結べる如きさはらば消えなむおぼつかなきの二葉に籠れる力こそめでたけれ

三五 二葉に籠れる力

菽の初菘の初かはゆき甲拆の姿のしをらしや地歴すれば芽ざさむとして芽ざし難きまま伸びむとして屯り身を屈めて一力入れ根入漸く足りて辛うじて世に出でたる嫩青微緑柔かにして夢を結べる如きさはらば消えなむおぼつかなきの二葉に籠れる力こそめでたけれ。(幸田成行)

〔菽〕〔菘〕〔甲拆〕〔根入〕〔嫩青〕〔微緑〕〔おぼつかなき〕

三六 無言の力

老將は兵を談ぜず良賈は深く藏す言多きものは卑しとせられ語少きものは憚らる言を以て招くは無言を以て招くに如かず語を以て斥くるは無言を以て斥くるに如かず桃李そもそも何を言ひて下自ら蹊をなせるや宗廟そもそも何を語つて人敢て瀆さざる

老將は兵を談ぜず良賈は深く藏す言多きものは卑しとせられ語少きものは憚らる言を以て招くは無言を以て招くに如かず語を以て斥くるは無言を以て斥くるに如かず桃李そもそも何を言ひて下自ら蹊をなせるや宗廟そもそも何を語つて人敢て瀆さざるや。(幸田成行)

〔老將〕〔良賈〕〔憚らる〕〔桃李〕そもそもその何を言ひて云々〔宗廟〕

三七 大丈夫の覺悟

大丈夫苟も身を學藝に委ねむとせばまづ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あるを要す發とは外に内の發するなり受とは内の外に受くるなり受くることは須く大海の百川を呑むが如くなるべし發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし受くることの多からざらむことをこれ嫌ひて川の大川の小を嫌はず發することの豊ならざらむことをこれ恐れて方の東方の西を問はず之を受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす受くるに嫌ふ所あり發するに問ふ所あるは兒女の情のみ大丈夫の覺悟にあらず

大丈夫苟も身を學藝に委ねむとせばまづ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あるを要す發とは外に内の發するなり受とは内の外に受くるなり受くることは須く大海の百川を呑むが如くなるべし發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし受くることの多からざらむことをこれ嫌ひて川の大川の小を嫌はず發することの豊ならざらむことをこれ恐れて方の東方の西を問はず之を受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす受くるに嫌ふ所あるは兒女の情のみ大丈夫の覺悟にあらず。(幸田成行)

〔大丈夫の覺悟〕〔學藝〕〔受發〕〔甘雨〕

士の身を學藝に委ぬる者誰か生を終るまで人の批評を被らざる者あらむや我思ふ所あり言ふ所あり人も亦思ふ所あり言ふ所あり我我が口を箝して人の言に就くことを難しとせば人をして其の舌を結んで我が意に従はしめむとするも亦甚だ難からずや批評の我に加へらるるや堯舜の聖と雖も亦之を如何ともするなし況や身死し肉爛れても日に新に日に新に批評の鞭笞を我が枯骨に加ふる士の蜂起簇生せむも亦未だ知るべからざるをや

足らざることを知るは満つるに到る

三八 批評

士の身を學藝に委ぬる者誰か生を終るまで人の批評を被らざる者あらむや我思ふ所あり言ふ所あり人も亦思ふ所あり言ふ所あり我我が口を箝して人の言に就くことを難しとせば人をして其の舌を結んで我が意に従はしめむとするも亦甚だ難からずや批評の我に加へらるるや堯舜の聖と雖も亦之を如何ともするなし況や身死し肉爛れても日に新に日に新に批評の鞭笞を我が枯骨に加ふる士の蜂起簇生せむも亦未だ知るべからざるをや (幸田成行)

〔我我が口を箝す〕〔舌を結ぶ〕〔日に新に〕〔批評の鞭笞〕〔枯骨〕〔蜂起簇生〕

三九 趣味饒なる人

足らざることを知るは満つるに到るの路なり。至らざるを

の路なり至らざるを悟るは上に向ふの途なり吾が趣味の猶足らざるを知り猶至らざるを悟る者は幸なり其の人の趣味將に漸く進み漸く長ぜむとす吾が趣味の幼きをも省みて我が善しとするものを必ず善しとし我がをかしとするものをいつもをかしとして高きに遷り卑しきを改むることをせぬ者は幸無し其の人の心の花既に石と化りて生命を失ひ居ればなり慾望は我を桎梏す自在無し趣味は我を繫縛せず自由あり其の物を得ざれば苦み其の願を遂げざれば惱み我が心を外の物の奴婢としてその使役するところとなるは慾望の然らしむるなり慾望は人を窘め趣味は人を活す趣味饒なる人は幸なるかな

順序をいへば時勢が一代の風尚を定

悟るは、上に向ふの途なり。吾が趣味の猶足らざるを知り、猶至らざるを悟る者は幸なり。其の人の趣味將に漸く進み、漸く長ぜむとす。吾が趣味の幼きをも省みて、我が善しとするものを必ず善しとし、我がをかしとするものをいつもをかしとして、高きに遷り、卑しきを改むることをせぬ者は幸無し。其の人の心の花既に石と化りて、生命を失ひ居ればなり。慾望は我を桎梏す。自在無し。趣味は我を繫縛せず。自由あり。其の物を得ざれば苦み、其の願を遂げざれば惱み、我が心を外の物の奴婢として、その使役するところとなるは、慾望の然らしむるなり。慾望は人を窘め、趣味は人を活す。趣味饒なる人は幸なるかな。(幸田成行)

〔趣味〕〔心の花〕〔慾望〕〔桎梏す〕〔自在〕〔繫縛す〕〔奴縛〕

四〇 趣味の善悪は風俗の本源

順序をいへば、時勢が一代の風尚を定めるのではあるが、其

めるのではあるが其の風尙が原因となつて後の時代精神を涵養する例もあるから國民全體の趣味の善悪は風俗の本源であるかの文藝を重んじて移風易俗の要具となるのもそれらが趣味性涵養の最大機關であるから國民の善悪美醜の評價力即ち理想建設の地盤は偏に此の趣味性の高下によつて定まる

の風尙が原因となつて後の時代精神を涵養する例もあるから國民全體の趣味の善悪は風俗の本源であるかの文藝を重んじて移風易俗の要具とするのもそれらが趣味性涵養の最大機關であるから國民の善悪美醜の評價力即ち理想建設の地盤は偏に此の趣味性の高下によつて定まる。

(坪内雄藏)

〔風尙〕〔移風易俗〕〔善悪美醜の評價力〕〔理想建設の地盤〕

四一 人生は短し藝術は長し

人生は短し藝術は長しと古人は言ひたり然れどもこれ果して古今東西幾何の文學藝術にか適用せらるべき英雄豪傑の偉業は樞花一朝の榮にして多くの星霜を経たる後には空しく山丘と化し終れどもひとり文學者藝術家の大作は長へに日月を懸くといふそは果して事實なるべきか古今東西の名篇傑作にして今なほ眞に人心

「人生は短し藝術は長し」と古人は言ひたり然れどもこれ果して古今東西幾何の文學藝術にか適用せらるべき英雄豪傑の偉業は樞花一朝の榮にして多くの星霜を経たる後には空しく山丘と化し終れどもひとり文學者藝術家の大作は長へに日月を懸くといふそは果して事實なるべきか古今東西の名篇傑作にして今なほ眞に人心を鼓吹し得る

を鼓吹し得る程のもの果して多く世に存せりや否や

程のもの果して多く世に存せりや否や。(坪内雄藏)

〔藝術〕〔樞花〕〔星霜〕〔山丘と化す〕〔果して〕〔鼓吹〕

四二 吾等人間を救済するもの

凡そ吾等人間を救済するものが三つある第一は文學の力で第二は道德の力第三は宗教の力である文學は感情によつて直觀的に救済の任務を果さうとし道德は意志によつて漸進的に救済しようとし宗教は其の中間に立つて半面は情により半面は意志によつて救済せむとするものである此の三者は此の如く分登る麓の路に於てこそ違へつまりは同じ高嶺の月を見むとするものであるかやうに考へれば其の何れの道によつて救済を求むるも其の人人の自由であつて必ずしも己に同じき者に黨して異なる者を伐つの必要がないことは明かである

凡そ吾等人間を救済するものが三つある第一は文學の力で第二は道德の力第三は宗教の力である文學は感情によつて直觀的に救済の任務を果さうとし道德は意志によつて漸進的に救済しようとし宗教は其の中間に立つて半面は情により半面は意志によつて救済せむとするものである此の三者は此の如く分登る麓の路に於てこそ違へつまりは同じ高嶺の月を見むとするものであるかやうに考へれば其の何れの道によつて救済を求むるも其の人人の自由であつて必ずしも己に同じき者に黨して異なる者を伐つの必要がないことは明かである。(藤井健治郎)

〔直觀的〕〔漸進的〕〔分登る麓の路云々〕〔己に同じき者〕〔黨す〕

智に働けば角が立つ情に棹させば流される意地を通せば窮屈だとかくに人の世は住みにくい住みにくさが高じると心安い處へ引越したくなる何處へ越しても住みにくい悟つた時詩が生れ畫が出来越すことのならぬ世が住みにくければ住みにくい處をどれ程か寛げて東の間の命を東の間でも住みよくせねばならぬここに詩人といふ天命が出来ここに畫家といふ使命が降るあらゆる藝術の士は人の世を長閑にし人の心を豊かにするがゆゑに貴い

四三 藝術の士は貴い(一)

智に働けば角が立つ情に棹させば流される意地を通せば窮屈だとかくに人の世は住みにくい住みにくさが高じると心安い處へ引越したくなる何處へ越しても住みにくい悟つた時詩が生れ畫が出来越すことのならぬ世が住みにくければ住みにくい處をどれ程か寛げて東の間の命を東の間でも住みよくせねばならぬここに詩人といふ天命が出来ここに畫家といふ使命が降るあらゆる藝術の士は人の世を長閑にし人の心を豊かにするがゆゑに貴い。

(夏目金之助)

〔智に働けば角が立つ〕〔情に棹させば流される〕〔意地〕〔寛く〕

〔東の間〕〔天命〕〔使命〕

四四 無聲の詩人無色の畫家(一)

住みにくき世から住みにくき煩を引抜いて有りがたい世界をまのあたりに寫すのか詩である畫である或は音楽と彫刻であるこまかに言へば寫さないでもよいただまのあたりに見ればそこに詩も生き歌も湧く著想を紙に落さぬとも鏤鏤の音は胸裏に起る丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自ら心眼に映るただおのが住む世をかく観じ得て靈臺方寸のカメラに澆季潤濁の俗界を清くうららかに收め得れば足るこの故に無聲の詩人には一句なく無色の畫家には尺維なきもかく人生を觀じ得るの點に於てかく煩惱を解脱し得るの點に於てかく清淨界に入し得るの點に於て又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て我利私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て千金の子よりも萬乗の君よりもあらゆる俗界の寵兒よりも幸福である

住みにくき世から住みにくき煩を引抜いて有りがたい世界をまのあたりに寫すのが詩である畫である或は音楽と彫刻であるこまかに言へば寫さないでもよいただまのあたりに見ればそこに詩も生き歌も湧く著想を紙に落さぬとも鏤鏤の音は胸裏に起る丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自ら心眼に映るただおのが住む世をかく観じ得て靈臺方寸のカメラに澆季潤濁の俗界を清くうららかに收め得れば足るこの故に無聲の詩人には一句なく無色の畫家には尺維なきもかく人生を觀じ得るの點に於てかく煩惱を解脱し得るの點に於てかく清淨界に入し得るの點に於て又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て我利私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て千金の子よりも萬乗の君よりもあらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

(夏目金之助)

〔煩〕〔詩も生く〕〔著想〕〔鏤鏤の音は胸裏に起る〕〔丹青〕〔畫架〕

〔塗沫す〕〔五彩の絢爛〕〔心眼に映る〕〔かく隠し得〕〔壘臺方寸
 のカメラ〕〔濤季瀟瀟の俗界〕〔うららかに收む〕〔尺練〕〔煩惱
 〇を解脱す〕〔清淨界〕〔不同不二の乾坤〕〔羈絆を薄蕩す〕〔千金
 の子〕〔萬乗の君〕

四五 風は過ぎゆく人生の聲なり

飄然として何處よりともなく來り飄然として何處へともなく去る初なく終を知らず蕭蕭として過ぐれば人の腸を斷つ風は過ぎゆく人生の聲なり何處より來りて何處に去るか知らぬ人は此の聲を聞きてかなしむ

〔飄然〕〔蕭蕭〕〔腸を斷つ〕〔過ぎゆく人生の聲〕

四六 穴を守るの蟹巢を忘るるの鴉

吾人の周圍を見廻せば爲す可き事爲さざる可からざる事甚だ多し然も自ら顧みれば力微にして才足らず茫茫

吾人の周圍を見廻せば爲す可き事爲さざる可からざる事甚だ多し然も自ら顧みれば力微にして才足らず茫茫たる

れる人生漠漠たる乾坤殆ど手の著くべきなく脚の擧ぐべきなし吾人自ら憂悶を歓迎せざれども渠は招かざるの客として勝手に我を襲ふなり是に於てか或者は自ら窮屈なる小我の城に立籠り或者は世界に吞まれて自己として自己の立場を失ふ即ち穴を守るの蟹たらざれば巢を忘るるの鴉なり

人生漠漠たる乾坤殆ど手の著くべきなく脚の擧ぐべきなし吾人自ら憂悶を歓迎せざれども渠は招かざるの客として勝手に我を襲ふなり是に於てか或者は自ら窮屈なる小我の城に立籠り或者は世界に吞まれて自己として自己の立場を失ふ即ち穴を守るの蟹たらざれば巢を忘るるの鴉なり。(徳富猪一郎)

〔小我〕〔穴を守るの蟹〕〔巢を忘るるの鴉〕

四七 風雅の嗜ある者

風雅の嗜ある者はよく自ら容忍することを得何となれば其の暗黒なる一面を見ると共に必ず他の光明なる一面を見ればなり蓮月尼の歌に曰く宿かさぬ人のつらさをなさけにて臘月夜の花の下ぶしともしかくの如く觀じ來らば人生何に處してか自得せざらむ

風雅の嗜ある者はよく自ら容忍することを得何となれば其の暗黒なる一面を見ると共に必ず他の光明なる一面を見ればなり蓮月尼の歌に曰く宿かさぬ人のつらさをなさけにて臘月夜の花の下ぶしともしかくの如く觀じ來らば人生何に處してか自得せざらむ。(徳富猪一郎)

〔容忍す〕〔暗黒なる一面〕〔光明なる一面〕〔つらさ〕〔なさけ〕

人は物質上の逼迫にのみ壓せられて
而して後動くものにあらざるもの
や必ず亦精神上の急須之に伴はざる
はなし或は之が主たらざるはなし人
或は社會の變革の原因を以て一經
濟的作用に歸するものあり蓋し思
はざるの甚しきのみ人は麴麴のみに
て生くるものに非ずとの眞理は個人
の上へのみ應用すべきものは社會
亦固より此の眞理の支配を免るる能
はざるを見ずや

社會の最大部分は傳聞によりて斷定

〔花の下ふし〕

四八 精神上の急須

人は物質上の逼迫にのみ壓せられて、而して後動くものに
あらず。その動くや、必ず亦精神上の急須之に伴はざるはな
し、或は之が主たらざるはなし。人或は社會の變革の原因を
以て、一經濟的作用に歸するものあり。蓋し思はざるの
甚しきのみ、人は麴麴のみにて生くるものに非ずとの眞理
は、個人の上へのみ應用すべきものは、社會亦固より此の
眞理の支配を免るる能はざるを見ずや。(徳富猪一郎)

〔逼迫〕〔壓す〕〔動く〕〔急須〕〔經濟的作用〕〔人は麴麴のみに
て云々〕〔…ものかは〕〔見ずや〕

四九 時世の興廢

社會の最大部分は傳聞によりて斷定をなすものなり。若し

をなすものなり。若し多少優等の腦力
を有するものが斷定を下すことあら
ば世の群集は諺に「犬吠形百犬吠聲
と云へるが如く、猶猶として附和雷同
し傳播普及遂に一大潮流を成すに至
る之を譬ふれば、猶斷崖の上より一小
石を投ずるに此の石始は他の小石を
伴ひ漸く戛然として幾多の大石を突
飛ばし次第に勢力を倍加して遂に百
千大小の石と共に轟然雷吼して谷底
を撃つが如し。總べて社會に於ける潮
流は何人か先鞭を著けて之が始を爲
したるに因由せざるなし。是故に時世
の興廢は自然に一任すべきにあらず
之を興さむと欲せば進んで之を興す
べきなり。

凡そ社會は一個の活物にしてその精

多少優等の腦力を有するものが、斷定を下すことあらば、世

の群集は諺に「犬吠形百犬吠聲」と云へるが如く、猶猶とし
て附和雷同し、傳播普及、遂に一大潮流を成すに至る。之を譬
ふれば、猶斷崖の上より一小石を投ずるに、此の石始は他の
小石を伴ひ、漸く戛然として幾多の大石を突飛ばし、次第に
勢力を倍加して、遂に百千大小の石と共に轟然雷吼して谷
底を撃つが如し。總べて社會に於ける潮流は、何人か先鞭を
著けて、之が始を爲したるに因由せざるなし。是故に時世の
興廢は自然に一任すべきにあらず、之を興さむと欲せば、進
んで之を興すべきなり。(井上哲次郎)

〔最大部分〕〔犬吠形百犬吠聲〕〔猶猶〕〔附和雷同〕〔傳播普及〕
〔潮流〕〔戛然〕〔雷吼す〕〔先鞭を著く〕

五〇 社會は一個の活物なり

凡そ社會は、一個の活物にして、その精神その思潮は、歲月と

神その思潮は歲月と共に變化するものなり個人の性格をして之に伴ひて變化しゆかしめば可苟も變化することなくんば早晩世と相背離して失墜することなきを保せず

共に變化するものなり。個人の性格をして、之に伴ひて變化しゆかしめば可、苟も變化することなくんば、早晩世と相背離して、失墜することなきを保せず。(中村孝也)

〔青龍〕〔失墜〕

標準國文新鈔終

標準國文新鈔

昭和四年三月十七日印
昭和四年三月二十日發行

定價金五拾參錢
昭和四年度臨時定價金八拾八錢



編者 光風館編輯所編
發行者 上原才一郎
印刷者 山崎與吉
發行所 光風館書店

〔電話〕
〔振替〕
東京三〇八七番

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候は、直に御送本可致候



